

女子学生の情報ネットワークサービス利用の意識について

八城年伸†

安田女子大学現代ビジネス学部†

はじめに

現在、情報サービスのユーザー認証においては、本人しか知らない知識による認証（WYK認証）と、本人しか持っていない所有物による認証（WYH認証）が主流となっている。代表的なWYK認証としてはパスワードがあるが、従来のユーザー教育においては、ネットワーク経由の不正利用を想定して、1）定期的に変更する、2）他の情報サービスとの使い回しをしない、とされてきた。

それに対して筆者がユーザー教育と利用相談の現場で感じたのが、パスワードの変更に対する拒絶反応で、従来のユーザー教育に対する疑問から、ユーザーの意識調査を行ってきた。主たる対象は、情報に関する詳しい知識を持ち合わせていない段階の女子大学生である。

その結果、作成したパスワードは記憶するために身近な事項への関連づけをしておき、なおかつそれが第三者に漏れやすい事項であるケースが少ない、という結果が得られた。さらには、年を追うごとにパスワードを使い回す傾向が顕著となっていた[1]。この傾向が継続する可能性があるのかを探るため、昨年度より調査対象に女子中学生と女子高校生を加えて調査を行っている。

調査の概要

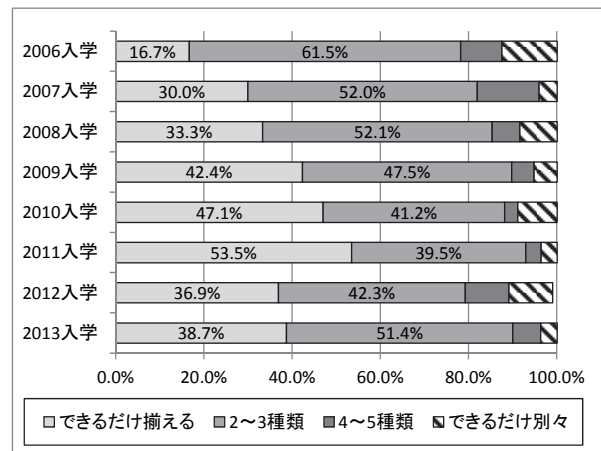
定期的なパスワードの変更、および情報サービスごとにパスワードを作成することは、作成や記憶することそのものがユーザーの負担となるだけでなく、パスワードそのものが単純になる可能性がある。すなわち、ソーシャルアタックに弱くなると考えられるため、調査においてはパスワードの使い回し、記憶するために連想した事項、パスワードの強度、パスワードに用いている文字種に関する設問を多くしている。

調査は筆者が担当する講義の他、対象の学生が出席するガイダンス等において、調査票方式で実施した。調査の時期と調査票の回収数は以下の通りである。

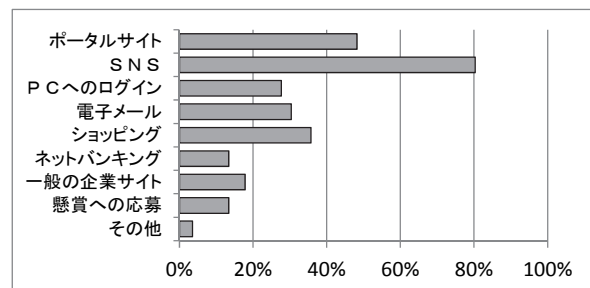
	前期			後期		
	回数	月	人数	回数	月	人数
2006年度	第1回	7月	184	第2回	1月	196
2007年度				第3回	12月	173
2008年度	第4回	7月	282	第5回	12月	99
2009年度	第6回	7月	78	第7回	1月	247
2010年度	第8回	6月	69	第9回	12月	285
2011年度	第10回	6月	122	第11回	12月	587
2012年度	第12回	6月	111	第13回	11月	301
2013年度	第14回	7月	234	第15回	11月	N/A

使い回しの傾向

パスワードの使い回しについては、何種類のパスワードを使い分けているか、利用している情報サービスの数、もっともよく使用するパスワードを用いている情報サービスは何か、という設問から傾向を導き出した。



2011年入学生まで「できるだけ揃える」とする回答が遡増傾向にあったが、2012年入学生以降においては変化が見られなくなっている。



パスワードの使い回しに関しては、選択肢を選んだ平均値は2.71である。利用している情報サービスの数の変化が少ないこと、使い回しを

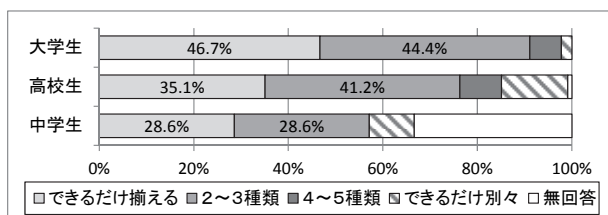
Survey of use consideration of information service in woman student

†Toshinobu YASHIRO, Yasuda Women's University

してない学生は 22 名 (19.6%) しかいないことを考えると、使い回しが常態化していると言える。

中高生の使い回しの傾向

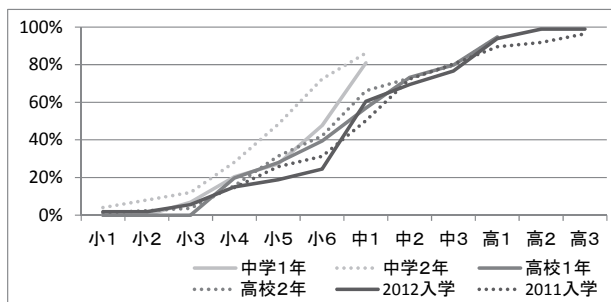
パスワードの使い回しは年を追うごとに常態化している、すなわち若年層ほど使い回しに抵抗がないとの仮説をたて、女子中学生と女子高校生を対象とした調査を実施した。山陽女学園非常勤講師の瀧本麻衣子氏の協力で、中等部1年の25名、高等部1年の115名の回答が得られた。比較対象は第15回調査の中で学年が近く、習熟度の偏りが少ない、安田女子大学現代ビジネス学部の2年次生(2012年入学)とした。



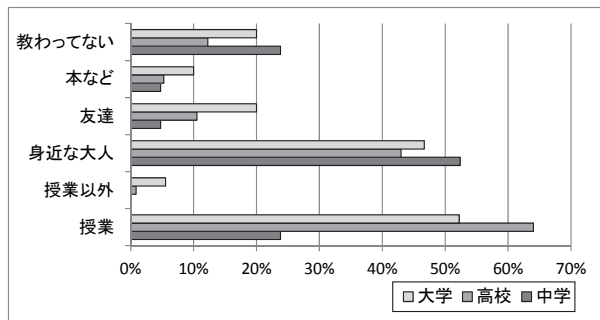
パスワードの使い回しについては、比較した三者間で有意差が認められた。利用している情報サービスの数については、情報サービスを利用し始めてからの期間に比例する結果となった。以上のことから、情報サービスを利用することに慣れるに従い、記憶や管理のしやすさを優先してパスワードの使い回しをするようになっていくと考えられる。

利用開始時期

パスワードを必要とする情報サービスの利用開始時期を学年で尋ね累積比率を求めた。学年が不明な回答は、回答人数を基に比例配分した。

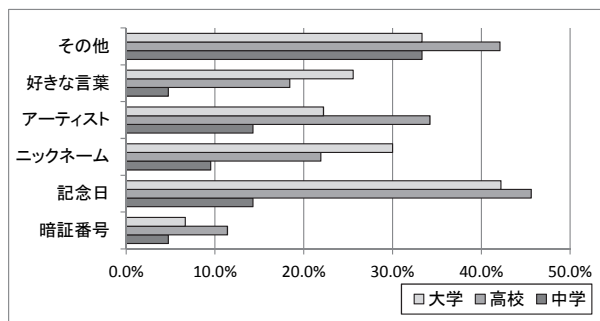


有意差はないが、若年層ほど情報サービスを利用し始める時期が早くなっている傾向が認められる。全体の半数が利用し始める時期が小学5年まで低下していること、授業で教わったとする回答が 23.8%でしかないこと、その代わりに身近な大人達が担っていることを考えると、パスワード管理教育を小学校で実施することが急務であると言える。



連想記憶

パスワードを記憶するための、連想記憶の基となった事項を複数回答で尋ねたところ、高校生や大学生は「好きな言葉やフレーズ」など他人から推測されにくいとされる事項を用いる割合が増えている反面、ニックネーム、何らかの記念日、好きなアーティストなど、日常的に話題にする事柄も増え、ソーシャルアタックに対する強度が二極分化していると考えられる。



まとめ

情報サービスの利用開始時期の低年齢化に対応するためには、かねてより必要性が指摘されている情報モラル教育と併せ、小学校において実施することが急務である。しかしながら、現在の小学校の学習指導要領では、情報活用能力は総合的な学習の時間において扱うとされているため、環境面の整備が必要となる。

今回の調査は標本数が限られていることから実態の一端を覗いたものでしかない。中学生の無効回答が多い設問もあり、改善の余地があると考えられる。今後は、設問を改善の上で標本数や調査対象を拡大すること、同じ調査対象に対する継続調査により、実態をより正確に把握することを今後の課題としたい。

参考文献

[1] 八城年伸、「女子大学生の在学中におけるパスワード管理意識の変化について」、大学ICT推進協議会 2011年度年次大会論文集、pp441-444、2011